

4歳児を対象とした総合的造形の教材研究

—ペープサート作りとその操作から「おはなしでてこい」の実践—

The Practical Research of The Composite Molding for a Four Years Old Child
—paper puppet theater with the story

平野敦子*・富岡卓博**

Atuko HIRANO and Takuhiro TOMIOKA

キーワード：4歳児教育 造形表現 ペープサート ファンタジー

はじめに

4歳児55名を対象に紙粘土によるペープサート作りを行なった。また、それを用いた操作から、「おはなしでてこい」と題する実践によって幼児から話を導き出し、さらに発展的にペープサート絵本とでもいうような総合的創作活動へと導入した。

本稿は、その方法と内容を紹介するとともに、そこから得られた結果を報告し、あわせて、4歳児の造形に関わる発達の諸課題について考察する。

特に、今回の実践でもっとも特徴的な点は、4歳児の造形として非常に長時間の継続的な活動であったことにある。4歳児が1回で集中できる時間は、精神的な面から活動の持続可能に限りがある。そこで、日と時間を変えて発展的に積み重ねる方法でおこなわれた。どこまで4歳児が総合的な大題材に取り組めるのか試された。

本実践のもう一つの大きな試みとして、今日の4歳児の発想力の実態を捉えることにある。実践後の分析と考察において明らかにしていきたい。

すなわち本実践は、

- (1) 完成まで長時間課題であること。10分から70分の活動を日を改めながら多くの時間を費やして実施したこと。
- (2) 幼児の意欲を引き出すために、それぞれの活動が内容を変化させ展開したこと。
- (3) その結果、4歳児にしては密度のある表現活動となったこと。
- (4) 制作品を使って想像活動へと導き、4歳児作の話作りに発展したこと。

(5) 導き方によって、4歳児が話作りがどの程度可能であるかが測られること。

I 実践報告

1 実施の方法

(1) 対象者

- ・対象者：本巣市立糸貫東幼稚園 4歳児年中クラス、男児20名、女児35名の計55名。
- ・指導者：平野敦子、同園教諭（今西美枝子、大野明子、大野綾希、溝口由美、澤部恵利子）
- ・実施日：平成22年6月から11月にかけて。

- ① 6月9日 帰りの会10分おはなしの導入
- ② 油性粘土で、好きなものをつくる（20分～30分を6回）
- ③ 7月5日の活動（30分ほど）
- ④ 7月6日の活動（30分ほど）
- ⑤ 7月8日70分
粘土のペープサートの制作 I
- ⑥ 7月9日70分
粘土のペープサートの制作 II
- ⑦ 10月4日、5日、6日の活動
お話を表現する
- ⑧ 10月6日の活動（帰りの会の15分）絵の背景制作の活動のための意欲づけ
- ⑨ 10月7日70分
イメージを深め、背景を描く
- ⑩ 10月7日以降の活動
舞台の製本と題名をつけて、表紙を作り、表紙を飾る
- ⑪ 11月6日・7日 作品展に展示（ぬくもりの里）
- ⑫ 11月8日以降 給食後の時間など
全員がみんなの前で、出来上がった絵本とペープサートでお話する

* 造形教室主宰

** 岐阜大学教育学部美術教育講座

(2) 展開 (各段階の内容)

① おはなしの実演で導入

6.9 帰りの会10分

4歳児の前で、指導者の作った紙粘土のペープサートで下記の話を見て。



ねこ 「みーちゃん」
うさぎ「うーちゃん」
(厚紙を台紙にして、紙粘土で造形して彩色。高さ約15センチ)

写真1 導入用のペープサート (筆者作)

みー「うーちゃん お山があるよ。のぼってみようか？」

うー「いいよ、行って みよう！」

ねこの みーちゃんと うさぎの うーちゃんが 絵に描いた山を 登り 始める。

うー「よいしょ！よいしょ！高いから大変だね！」

みー「あと ちょっと だよ、がんばろうね！」

山の 頂上に 着く。

うー「やった！着いた！」

みー「お腹へっちゃった！おべんとう たべようか！」

うー「そうしよう！」

みー「私の おべんとうは うめぼしと しゃけの おにぎりだよ。うーちゃんのは なに？」

うー「わたしの おべんとうは、にんじんの サンドウィッチに にんじんジュースだよ！」

ここで、うさぎちゃんのおべんとうがにんじんだったことに、子どもたちは大喜びした。多くの子ども達はその話がイメージできて、場面のおもしろさも共感できた。

みー「さぁ、食べよう！」

うー「むしゃ、むしゃ！」

みー「お腹いっぱいになったから、お家に帰ろうか？」

うー「そうしよう！今度は 滑り台で 帰ろうか？」

みー「いいよ！」

と言って、山からしゅーっと滑って帰った。

おわり

この導入の寸劇を、4歳児たちは集中して聞き入り、ペープサートの人形に共感していた。子どもたちは、絵本やペープサートの劇を見たり話を聞く機会に恵まれており、話に興味があった。

② 油性粘土で、好きなものをつくる

20分～30分を6回

白い油性粘土200gくらいからはじめて、いろいろなものを作った。量も徐々に増やしていった。お団子やへびから始まりいろいろなものを作った。



立体的な表現と、絵のような平面的な表現が未分化のまま入り混じっている

写真2 油性粘土の自由作品

写真2は、作ったものをそのままにしておいてほしいとの子どもからの要望があり、少しづつ作りためた作品である。

毎日、油性粘土に触れ、作ったり壊したりしながら求める形を模索する過程があった。子どもがお互いの作品を参考にしながら、自分の作りたい物を決めることが出来るようになり、粘土造形に対する意欲と自信が高められた。

③ 粘土のペープサート作り (絵で描く)

7.5 (30分)

「粘土でペープサートをつくらう」という呼びかけに対して、子どもたちは制作を理解できていた。すでに、お誕生会で先生のペープサートの操作を見て、棒付の人形をペープサートとして認知していたからである。

2体を作るとして、それぞれ何をつくりたいかを考え、まず画用紙に絵を描く課題を与えた。

④ 油性粘土のペープサート試し作り (1体)

7.6 (30分)

前日に描いた絵のうち、1体を白い油性粘土で作ってみた。

⑤ 色粘土のペープサート作り (本制作I)

7.8 (70分)

描いた絵と作った油性粘土を参考にしながら、ペープサート1体を作った。

事前の準備として、子どもたちの作りたいものから、必要と考えられる色を白い紙粘土に混ぜておいた。また、活動の場作りとして、必要な色の粘土を効果的に配るためと、子どもたちが工夫し合えたり学び合えたりする環境を作るために、粘土で作りたいものが同じ子どもたちをなるべく同じ机に集めるようにした。

出来上がったパーソナリティに名前をつけて、お話の主人公になるようにイメージづけた。



写真3 色粘土で形作り（下絵を参考にして）

・指導保育者Mの感想

父の日のプレゼントを紙粘土で作った経験があり、色つきの粘土での制作を子どもたちは楽しみにしていた。沢山の色つきの粘土に触れ、「ふわふわしている！」と言って、嬉しそうに粘土遊びをしていた。顔を作るときは、「お顔は肌色の粘土、目は黒、口は赤」などお絵描き感覚で、色つき粘土を手にとって成形していった。全員が迷うことなく楽しく時間内に作り上げることができ、名前をつけることができたので、よかった。

・指導保育者Oの感想

子どもたちは色があって、意欲的になれた。へびやきょうりゅうを作っている子が「口を作ろう！」といいながら、はさみで粘土に切りこみ作ることができた。

・指導保育者Sの感想

粘土経験が少なかったけれども、子どもたちははっきりとした形に対するイメージを持っていたので、全員が作り上げることができたと考える。

・指導保育者Iの感想 「ひげを作ろう！」「もようを作ろう！」と形を工夫して加える姿がみられた。

・他の感想

紙粘土は細かいものが作れて、目を小さな小さなおだんごにして作っていて、子どもたちが出来上がりに満足していた。

・粘土は作り直しができるので、子どもたちが思い切って作ることができていた。

⑥ 色粘土のペープサート作り（本制作Ⅱ）

7.9（70分）

ペープサートもう1体を作った。

前日と同様に、事前の準備として、子どもたちの作りたいものから、必要と考えられる色を追加して白い紙粘土に混ぜておいた。

・指導保育者Mの感想として、粘土で一度も作っていないものを作るので、どこまで作れるか心配であったが、子どもたちはイメージだけを頼りに作っていった。前日に比べると、多少とまどっていたが、前日の体験を生かして、時間内に全員作ることができた。紙粘土の扱いにも前日より慣れてきて、はさみで粘土を切ることもできた。

この制作が、粘土造形に対する更なる興味や意欲を高められ、直接的に形に現れない成果があったと思われる。

教師の手により、出来上がった粘土作品に棒をつけてペープサートに仕上げた。

水彩絵の具の体験

「えのぐあそび」3題

- ① 水彩絵の具をタンポとスタンプを使って「山」を描く体験
- ② パス《油性》で水彩絵の具をはじき絵「海」を描く体験
- ③ 水彩絵の具をストローで吹き広げる「花火」を描く体験

- ⑦ 「おはなしでてこい」ペープサート操作から
・10.4～6

指導保育者MとO（クラス担任）の聞き取り準備。

山の絵、海の絵、花火の絵

（背景画として 水彩絵の具あそびの3題を利用）

聞き取り方法

描いた3つの絵を置いたり黒板に貼って、子どもがひとつのペープサートを持ち、もうひとつを先生が持ち、「どこに行こうか？」「なにをする？」「どんな気持ち？」と少しずつ聞いていった。個別にすべてのこどもから聞き取られた。

・指導保育者Mの感想

教師の想像することとは異なる、びっくりするような発想が沢山出てきて驚いた。

・指導保育者Oの感想

教師の想像すること以上の、楽しい発想が沢山出てきて興味深い。

・指導保育者Iの感想

教師が話を聞くのではなく、ペープサートのパーソナリティが聞いたことにより、お友達とお話しているような感じで、ペープサートのパーソナリティになりきって、お友達といっしょに山に行ったり、海に行ったりすることなどをイメージできたのではないかと考える。

聞き取りの中で、必要な場面を子どもと相談して、ひとつどの場面を描きたいかを決めた。

教師が子どもたちの話を聞いていて、とても楽しかったので、出来上がった話を給食の時間などに、クラスの前で話す機会を作った。子どもたちもみんなの前で話すことで、自分の話をまとめたり深めたりすることができ、自信を持つことができた。

K.N児の聞き取りの結果は、次のようであった。

『てんちゃんと かぶちゃん』

やまに てんちゃんとかぶとちゃんが、すんでいました。2ひきはうみにいってみたいと、ずうっとおもっていました。「そうだ！はねがあるから、とんでいこう！」と、とんでいきました。うみで、くじらにあいました。くじらといっしょにあそびました。せなかの ふんすいに のせてもらって、びゅーびゅーとびました。すると、はなびのところにつきました。とっても きれいなはなびを みてかえりました。



写真4 K.N児 海の絵（くじらの潮吹き）



写真5 K.N児の色粘土ペープサート（棒なし）



写真6 K.N児背景画の前での操作の様子

このようにして、3日間にわたり順次55名全員から担任教師によって「おはなしでてこい」が行われ、話の聞き取りと記録が行われた。

さらなる個別化への展開の方途として、各人4枚目の背景画《自由画》制作

⑧背景制作の活動のための意欲づけ

10.6（帰りの会の15分）

自らの表現による背景画4枚目を描く課題

・先のK.N児がみんなの前で、自分の話を自分のペープサートと3枚の背景の絵を使って、身振りや動きをくわえながら、感情を込めてお話しをすることができた。それを聞いた子どもたちから大爆笑が起こった。

「明日はみんなのはなしから、もう一枚、みんなそれぞれ描こうね」と課題を示した。

⑨背景画制作 イメージを深め描く

10.7（70分）準備。水彩絵の具

導入として、先のK.N児の話を聞き、今日の自分の活動をイメージする。

4枚目の場面（山、海、花火の共通課題と他

に、それぞれの話に関係したもの)をパスで描いてから、水彩絵の具で彩色した。

子どもたちは、自分の描きたいイメージをしっかり持ち、迷うことなく、それをパスで描き始めた。それぞれの子どもの話を聞きながらパスで描いた後、必要な水彩絵の具のコーナーに導くという形で進めた。

似たような場面を描いている子どもは、使いたいと思われる水彩絵の具を置いた机に一緒に座るようにした。そのために移動する子どもを少数にすることができた。

⑩ 題名をつける 3場面の絵本として製本

準備。教師の手により、話の順番に背景の場面を貼り合わせる。

子どもたちは題名をつけて、表紙のクラフト紙の色を選ぶ。

表紙をつけた本の中から、一番気に入った場面を選ぶ。

⑪ 作品展に展示 本巢市ぬくもりの里

11.6・7

次の写真7のように、地域の文化祭で完成作品として展示された。



写真7 4歳児作のペープサートつき絵本の展示

子どもの一番気に入っている場面開いて、その前に2体のペープサートを粘土に刺して立て、場面の前に配置した。

⑬ 自由に発表の場を設ける (展覧会后)

以降 給食後の時間など

次ぎの写真8のように、みんなの前で、出来上がった自作絵本とペープサートでお話することができた。また、保護者との個別懇談で、絵本とお話をプリントして返却しながら、お子さんの様子をお話した。感動して、お家で子どもとやってみようと涙するお母さんもあった。

- ・「宝物です」
- ・「本当にこんなお話が話せましたか？」
- ・「子どもの想像力はすばらしいですね」



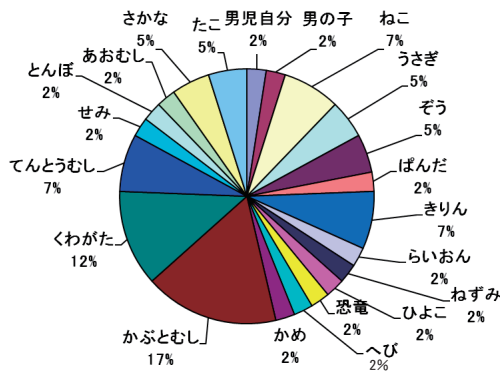
写真8 4歳児の自作ペープサート絵本の操作

II 実践の分析と考察

1 ペープサートの分析と考察

ペープサートとして園児1人につき2体を基本として作るものは自由に制作した。わずかに、3体の制作児がいたので、総数114であった。

次の図1-1は、男女児の作った対象を分析したものである。

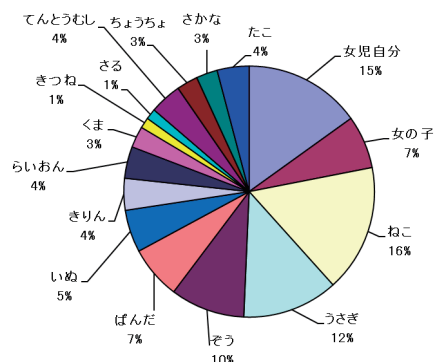


図表1-1 男児のペープサートの内容

《男児》20人が、全41体21種

上の図表1-1に示すように、男児で多いのは、かぶとむし7体、くわがた5体で、ねこ3体、きりん3体、てんとうむし3体であった。

- ・虫類は、かぶとむし、くわがた、てんとうむし、せみ、とんぼ、あおむしなど42%。
- ・動物類は、ねこ、きりん、うさぎ、ぞうなど32%。
- ・人物は、男児像わずかに2体で4%。



図表 1-2 女兒のペープサートの内容

《女兒》35人が、全73体16種

上の図表 1-2 に示すように、女兒の多いのは、人物像の女兒像16体、ねこ12体、うさぎ9体、ぞう7体、ぱんだ5体であった。

- 虫類は、てんとうむし、ちょうちょの2種でわずかに4%。
- 動物類は、ねこ、うさぎ、ぞう、ぱんだなど10種で63%。
- 人物は、女兒像16体で22%と多い。

作る対象についての考察

男児は、多種にわたっている。かぶとむしとくわがたを代表とする昆虫類が多いのは予測通りであったが、4歳児男児にして早くも昆虫好き、といった感がある。人物が2体と女兒16体に比べ圧倒的に少ない。

恐竜がわずかに1体のみであったが、作りたくても難しいことによることが考えられる。

一方で、きりん、ひよこ、うさぎ、とんぼ、ねずみ、へび、ねこ、かめなど、優しいものを作った子も多くいた。きりとひよこのお話の内容は、「お花畑に行って、ママにプレゼントをしよう!」と言ってお花をいっぱい摘んだという優しい内容であった。

女兒は、動物類が多い。率にして男児のほぼ倍で全体の2/3を占めた。その中でも、ねこ、うさぎが21体と人気があった。ぞう、ぱんだと続く。

女兒の特徴的なのが、自分像も含めて、女の子を多くが作っている。これは、就学前から小学校低中学年までの長期におよぶ女兒一般の特徴で、すでに4歳児頃からの描画対象が今回の

実践においてそのままではまったといわれる。男児以上に女兒は、自分がお話の主人公となり、「ごっこあそび」や「おかさんごっこ」「ままごとあそび」のような自分の経験をイメージして、お話の主人公としていられる。

また、今日の子どもの身近な子ども文化として、絵本やテレビの子ども番組やテレビアニメなどに登場するかわいいキャラクターの影響によって、かわいいペープサートを作りたかったと考えられる。作ったペープサートも、かわいい服やスカートをはいていたり、冠をかぶっていたりして、おしゃれをしていて、その動物に女兒のあこがれの気持ちを投影していると考えられる。

表現についての考察

擬人化・アニミズム化

子どもたちが、動物特に哺乳類を、絵や粘土作品にする場合、描き方作り方に下図2のような2つのパターンが出てくる。

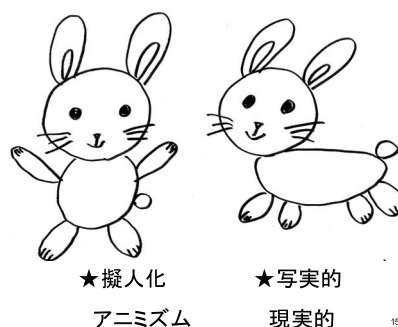


図2 表現パターンの比較 (筆者作画)

上の図2の、右の写實的・現實的と書かれたほうは、うさぎの前足、後足として表現されている。このように作る子どもたちは、実際に動物園などで見たり、図鑑、本で見たり、写真やテレビで生きている姿を見たり、実際に飼っていたりする体験から、形を認知していると考えられる。きょうりゅうなどは、骨や化石や標本で見たりしていることから、形を認知しているかもしれない。

この認知の良い点としては、動物の本当の姿を理解しているということである。実際に飼ったりしても、うんちをしたりするなど汚い部分

についても親しめ可愛がることができるようになると思われる。幼稚園指導要領などでも、うさぎなどを飼って、動物愛護の心を育むことも環境として重要と考えている。

図2の左、擬人化・アニミズムと書かれたほうは、うさぎを人間と同じとイメージしている。つまり、人間と同様に、うさぎの前足を「手」、後ろ足を「足」として認知している。それは、生まれたときから、自然の動物の姿を見る機会より、絵本、アニメ、テレビ、人形劇、いろいろなマークや印刷物・掲示物やぬいぐるみ・おもちゃを見て育ち、擬人化・アニミズム化された動物を目にすることが圧倒的に多いからだと考えられる。

幼児むけのテレビ番組の「おかあさんといっしょ」でも分るように、今日の子どもは乳幼児期から、日々の生活の中に沢山の擬人化・アニミズム化された生き物と暮らしている。

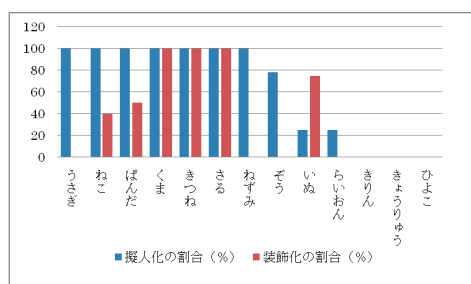
つまり、人と生き物が一体になって存在している感覚になりきっていると考えられる。

その結果動物がスカートをはいたり、リボンをしたりして、可愛い服を着たりして、あこがれの気持ちが表れてくる。

この話づくりに関しては、気持ちを自己投影したり、情景をイメージしたりする必要があるので、擬人化・アニミズム化された動物のペーパーサートも効果的と考える。

表現の擬人化・アニミズム化の分析

(分析は筆者の独断によるが、主に、人物の表し方や着衣の有無などの捉え方あきらかな相違の判断によった)



図表3 擬人化の割合

今回のペーパーサートのなかで、うさぎは、11体中11体全てが擬人化・アニミズム化された形

であった。

ねこも、15体中15体全てが擬人化・アニミズム化された形であった。そのうえ、ねこは、7体(46%)は、服や飾りをつけていた。服や飾りを作った子はすべて女兒であった。女兒の装飾性の表れであると考えられる。



写真9 ねこの表現

ぱんだも、6体中6体全てが擬人化・アニミズム化された形であった。そのうえ、ぱんだは、3体(50%)は、服や飾りをつけていた。服や飾りを作った子はすべて女兒であった。女兒の装飾性の表れであると考えられる。

くまは、2体中2体全てが擬人化・アニミズム化された形であった。そのうえ、くまは2体すべて(100%)が、服や飾りをつけていた。服や飾りを作った子はすべて女兒であった。女兒の装飾性の表れであると考えられる。

きつね・さる・ねずみは、1体中1体が擬人化・アニミズム化された形であった。そのうえ、きつね・さるは、2体とも服や飾りをつけていた。服や飾りを作った子はすべて女兒であった。女兒の装飾性の表れであると考えられる。

いぬは、4体中1体(25%)が擬人化・アニミズム化された形で、3体(75%)は現実的な形であった。しかし、現実的な形のいぬのうち3体(75%)でも、2体は服や飾りをつけていて、飾りをつけていた割合は75%になる。服や飾りを作った子はすべて女兒であった。女兒の装飾性の表れであると考えられる。



写真10 いぬの表現

らいおんは、4体中1体(25%)が擬人化・アニミズム化された形で、3体(75%)は現実的な形であった。らいおんは、服や飾りをつけていない。

きりんは、6体中6体(100%)全てが現実的な形であった。きりんは服や飾りをつけていない。

きょうりゅうは、1体中1体(100%)が現実的な形あった。きょうりゅうは服や飾りをつけていない。

このほか、ひよこ・さかな・かぶとむしなどは、現実的な形あった。

ぞうは、9体中7体(78%)が擬人化・アニメミズム化された形で、2体(22%)は現実的な形あった。ぞうは、服や飾りをつけていない。グラフからも、うさぎやねこに比べて、ぞうは擬人化している場合と現実的な形で表現している場合がある。下図の女兒のぞうは、現実的な形になっている。擬人化については、2つの組み合わせによる影響も考えなければいけない。女の子や男の子(人)との組み合わせになると、お友達という存在になるので擬人化してきている場合が多い。逆に下図のように、きりんやてんとむしなど、擬人化しにくいものとの組み合わせになると、擬人化されにくい場合もあった。

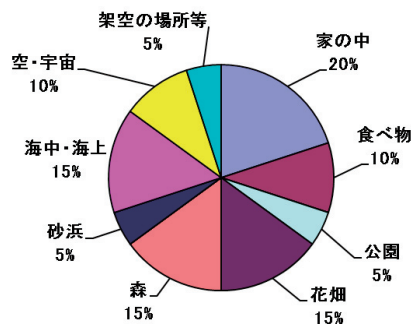


写真11 ぞうの表現 左は擬人化, 右は写実表現

2 背景画の分析と考察

背景画4枚目の分析

先の制作過程の、⑧背景制作および⑨背景画制作における自由課題、とした4枚目の背景画は、自らの創作話に関連しさまざまな表現となっている。それをデータ化したのが次の図表4-1、図表4-2である。



図表4-1 背景画の場面分析(男児)

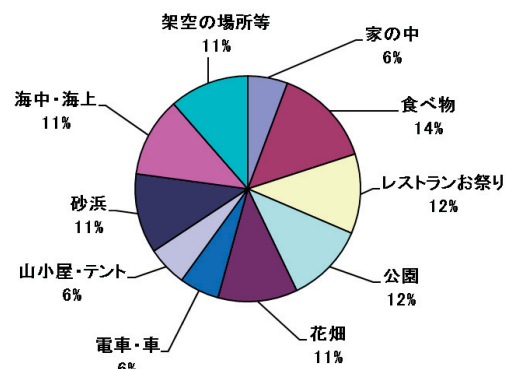
《男児》20人が、20画面9種

「家の中」が4人で多い。

「森」「花畑」「海中・海上」が3人同数で続く。

「食べ物」「空・宇宙」が2人ずつ。

「公園」「砂浜」「架空の場」が1人ずつ。



図表4-2 背景画の場面分析(女兒)

《女兒》35人が、35画面10種

「食べ物」が5人と多い。

「レストラン」「公園」「花畑」「砂浜」「海中・海上」「架空の場」同数で4人ずつ。

「家の中」「電車・車」「山小屋・テント」が2人ずつ。

背景画(自由課題)についての考察

4歳児の話づくりとして、自分の経験を基にして日常を語れることを期待していた。しかし、話がかなり情緒豊かなものになり、広がりもあり、架空の話がでてきたりして、教師を驚かした。

男児あわせて、食べ物に関連した画面が11人、「花畑」「森」を合わせ10人と多い。

男児の性差として、男児の特徴としては「森」が3人おり、「空・宇宙」が2人いた。いずれも女兒はいない。逆に女兒は「レストラン」が4人、男児はいない。

男児が、14人(70%)が屋外を描いている。それに対して、女兒は、24人(67%)が屋外を描いている。

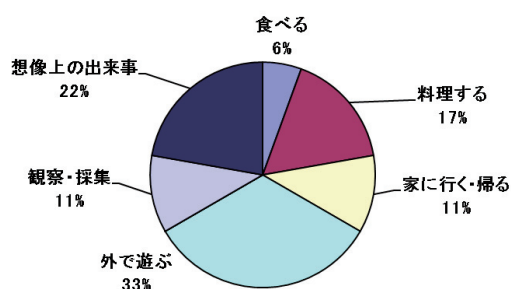
3 お話し内容の分析と考察

一般に描画において、3歳児期は自己中心的な認知によって、表現対象が一つの何かであることが多い。ところが4歳児期になると、同一画面に複数の事物が表現される変化の移行がみ

られる。「～している」とか「～と～が～している」といった育ちがみられる。つまり、行為性や複数の気持ちになって感じようとする姿への変化がみえてくる。今回の2体のペープサート操作による話づくりは、そうした4歳児の特性が発揮されたと考えられる。

操作しているうちに自己投影して、自分でも気づかなかった口に出しにくい感情や気持ちが表れている。全体の特徴は、かなり長い話になっていることである。気持ちを表す言葉や会話も沢山入っていて、情感が深まっていることである。その上、楽しい話が多い。

男児が好む戦いの話は、S. Tの『らいおんくんとせみくんのけんか』だけで、4歳児男児は、体力的な発育の顕著な5歳児の前の段階であることが表れていると思われる。また、危険なときに助けてくれる存在がでてきたりするが、結末は決まってハッピーエンドになる。



図表5-1 お話し内容の分析（男児）

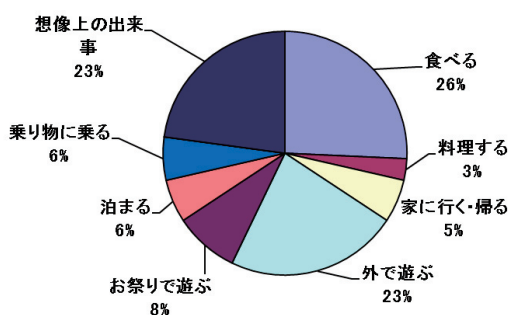
《男児》20人 6類型

「外遊び」が6人33%と多い。

「想像上の出来事」が4人22%。

「料理する」「食べる」あわせて4人23%。

「家の行き帰り」「観察・採集」各2人。



図表5-2 お話し内容の分析（女児）

《女児》35人 8類型

「食べる」「料理する」が合わせて10人29%と多い。

「外遊び」が8人23%と多い。

「想像上の出来事」も8人23%と多い。

お話し内容についての考察

お話し内容とその前に考察した場面画とは当然、大きくは関連していることが多い。

図表5-1および図表5-2から、「外遊び」は男女児とも多いが、特に男児では全体の1/3の6人と多い。内容は「公園で遊ぶ」が1人、「森で遊ぶ」が3人、「花畑で遊ぶ」が2人になっている。また、男児にだけ「観察・採集」という話があった。「砂浜で亀が卵を産むのを観察した」という話と、「ぶどうの木からぶどうを取って食べた」という話があった。

また、「料理する」は「きのこを採りきのこピザを作って食べる」「魚を焼いて食べる」「さばを料理して食べる」という話であった。やはり、男児の方が自然や生き物や外の環境に興味があるのではないかと想像される。それも、おおくが経験が基になっていると考えられる。

それに対して「想像上の出来事」の内容が、「空を飛ぶ」「ロケットに乗って宇宙へいく」「亀の背中に乗る」「くじらの背中に乗る」という話になっていて、広い世界への興味が表れていると思われる。

女児の話の特徴としては、「食べる」「料理する」が合わせて10人29%と多い。男児に比べ13%も多くなっている。

「外で遊ぶ」の内容は、「公園で遊ぶ」が3人、「花畑で遊ぶ」が3人、「砂浜で遊ぶ」が2人になっている。

女児の「想像上の出来事」の内容は、「くじらのおなかに入ってしまう」「海のおひめさまの家に行く」「亀の背中に乗る」「くじらの背中に乗る」などという話になっている。

創作話の事例

次に、先のK.N男児の話の他、男児2名と女児3名について、ペープサート、背景画、操作の様子、創作話を掲げ考察する。

・お話し事例1 S.T男児 (次頁の写真12)

『らいくんとせみのけんか』

もりにらいおんのらいくんがやってきて、せみをみつけました。らいくんはせみに「おい、いっしょにやまにいこうぜ。」といいました。そして、いっしょにやまにいきました。けんかをしました。らいくんが勝ち、なかなかおりをしていっしょにはなびをみました。

・お話し事例2 K.H女児 (次頁の写真13)

『おかしのおしろ』

かれんちゃんとうさこちゃんのふたりでやまにのぼりました。おべんとうをたべようとおもったら、おべんとうをわすれてしまいました。かれんちゃんだけがとりにかえろうとすると、みちにまよっておかしのおしろをみつけました。うさこちゃんもおかしのおしろによんできました。ふたりでおかしをたべてはなびをみにいきました。さっきわすれたおべんとうとじゅーすをたべながらみました。つぎのひは、うみにいってあそびました。

・お話し事例3 Y.F女児 (次頁の写真14)

『レストランにいく』

うみにもぐったらかいをみつけました。かいのなかにたからものがありました。よるになったのはなびをみました。ねこのととちゃんが「おはなみたーい」といいました。つぎのひ、やまにいきました。かくれんぼをしてあそびました。おなががすいたのでレストランにいきました。ととちゃんはオムライス、ぴあちゃんはハンバーグをたべました。

・お話し事例4 R.N女児 (次頁の写真15)

『はーとちゃんのうごくいえ』

きつねのはーとちゃんとりえちゃんはなかよしでりえちゃんが「うみにさかなつりにいこう」というのはーとちゃんは「うん」といってうみにいきました。うみであかいさかなあおいさかなくろいさかなをつって「たのしかったね。つぎはどこにいく？」ときくとりえちゃんが「やまにいこう」といいました。するときつねのはーとちゃんが「うん、わたしのいえがあるからあそびにおいで」といってふたりではーとちゃんのいえにいくことになりました。やまのなかのはーとちゃんのいえはさんかくでびんくいろでうごくいえでした。それですべりだいとかもあってたのしくあそびました。いえのなかでりんごやばななもたべ、くっきーをふたりでつ

くり、くっきーもたべました。よるになると、はなびだいかいがはじまり、ぶどうやりんご、かおとかのかたちのはなびがあがり、たのしいきもちになりました。それでりえちゃんはきつねちゃんのいえにとまりました。ふたりははなびのゆめをみながらねむりました。

・お話し事例5 H.M男児 (次頁の写真16)

『パパとママ』

おにいちゃん、どこかつれてって!と、いっちゃんがいったので、うみにいきました。はやちゃんはすーいすいっておよいだけど、いっちゃんはむり、しずんでしまいました。はやちゃんがたすけてあげました。「ありがとう、おにいちゃん」「どういたしまして」こんどははなびをみにいきました。

「おにいちゃん、おとがこわいよー」「みみをおさえれば、だいじょうぶだよ!」「おにいちゃん、ありがとう」「どういたしまして」「こんどはやまへいこう!」いっちゃんのめんどろはたいへんだからそろそろばばとままだにあいたくなかった。「ばばー、ままだ」とよんだらでてきてくれました。

事例の考察

事例1は、ライオンと蟬といった4歳児ならではの組み合わせとなっていて、違和感なく一緒に活動するユニークさがある。

事例2は、食べることと遊ぶことの2大テーマでこぎみよくスピーディに展開する。

事例3は、前事例同様に遊びと食べることがテーマで、次頁写真13の背景画「レストラン」の様子は4歳児にしては優れている。

事例4のR.N女児は、一番長いお話を考えた。聞き取りの担任教師は、その時の様子を、「どんだんお話が進んでいくので、聞き取るのが大変だった。」と語った。日頃から発想がユニークで、ままごとをしていても空想の世界を語りたりすることがある子のようなのである。色と形に対する感性も加わって、より具体的なイメージの深まりがある。

事例5 H.M男児は、1歳程になる弟がいて、この時はたくさん語った。話は、もう少し大きくなった自分と弟を想像し、弟を守るという思いやりとお兄さんとしての自覚あふれた展開で小冒険。



写真12 事例1 S.T男児



『らくんとせみのけんか』



写真13 事例2 K.H女児



『おかしのおしろ』

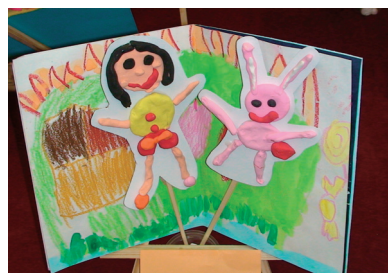


写真14 事例3 Y.F女児



『レストランに行く』



写真15 事例4 R.N女児



『はーとちゃんのうごくいえ』



写真16 事例5 H.M男児



『パパとママ』



Ⅲ 実践のまとめと4歳児の特質

ペープサートはpaper puppet theaterを短くした和製英語。普通は紙を切り抜いた形に棒をつけた操り人形を言うが、本実践では紙の代わりに紙粘土を用いた点でより半立体的となっている。形状からペープサートといて扱った。

本実践の要素として、大きくはペープサート作りとその舞台としての背景画を描く造形力の課題と、それを操作することから引き出した話作りの二点から構成されている。

(1) 4歳児のペープサート作り

ペープサート作りは比較的低年齢、つまり形ある造形ができ始まる4歳児の子どもにでもできることに着目して展開した。

日頃から油性粘土の使用経験が豊かなこともあり、10センチ程の大きさの形を紙粘土で造形することに全く困難な点は見受けられなく、楽しんでできていた。特に今回使用した紙粘土は、従来の物に比べ、着色がむらなく容易にでき、しかも、手に着きにくく、子どもの扱いやすい優れたものであった。

棒づけだけは今回は指導者によってなされたが、時間的な制約がなければ4歳児にも可能と思われる。

背景画(ペープサート操作から考えると、舞台といえる)は、水彩絵の具使用の導入として、技法をもとにした共通課題で描いた作品を応用した。ただ、途中から、話作りをした結果、表現したい目的を持って新たに4枚目を描画した。報告したように、それによって個々の子どもの作品の個性化がはかられ非常に効果的であったと考えられる。

(2) 4歳児のお話しの創作

「おはなしでてこい」と題した活動では、個別指導の形態で、2体のペープサートを、1本は指導者が、もう1本は4歳児が手にし、指導者の誘導的な言葉かけを通して聴きとられた。指導者のやさしい言葉かけで、子どもの中にある考えをひきだすように進める、といった柔らかな雰囲気の中でおこなわれ、2体のペープサートのからみが動きをともなう効果により、次々

と話が発想されていった。4歳児の創作の話として、次の点に多くの共通性が見受けられる。

- ① 名前つけが簡単に思いつける
- ② だれだれが、どこどこで、なにになにした(簡単な基本形の展開)
- ③ 出来事の展開がスピードがある(必要以上に多く展開しないで簡潔)
- ④ 始まり、展開、終わりがある(起承転結)
- ⑤ ハッピーエンドで話をまとめる
- ⑥ 内容に男女児の性差が認められる

4歳児が、教師の支援的な言葉かけなくして話を展開することは無理と判断したための方法であったが、それにしても、4歳児から引き出された話は予想以上に豊かである。母親の感想にあったように、驚きでもあった。

本実践は、手段を講じながらも4歳児であっても「じっくり待って引き出す」ことから生まれた結果であり、創造性への可能性を感じる結果を得られたと考える。

先の事例3のY.F女児の母親から、日頃の女児の様子を聞くことができた。それによると、好きな絵本を繰り返し読み聞かせていると、次第にストーリーを逸脱して勝手に自分流に発展させていくことがある、ということであった。すべての子がとは言えないまでも、生来的に自由にイメージ展開することを好むタイプがいることは確かのようなのである。

(3) 5歳児との比較

今回の4歳児実践「おはなしでてこい」と、先年に同園で行なった5歳児対象にした話作りをともなう造形「おはなし ふわふわ」と題する実践^(註1)と比べることができる。

次は、その時に創作した5歳児男児の話である。

パラサウルの ばらばらが みずを のんでいるとき かめ がおよいでいて いっしょに のみこんでしまった。それで くるしくて くちから ほのおがでてしまった。それが たいように あたって たいようがおちてきて ばらばらに あたってたけれど みずにもぐって たすかった。そこに おおきいあ

なが あいたので ぱらぱらは たんけんしに でかけた。

- ① 5歳児の話の内容は4歳児同様に展開の変化にスピードがある。
(4歳児と同様)
- ② しかし、どうしてそうなったかという文脈が整っている。
- ③ 状況について、簡単な説明が加わる。

このように、わずか1歳の違いにもかかわらず、話が具体性を持ってイメージされる。

本実践において、4歳児では、場面が変化することを求め、複雑な説明は求めずに、端的な展開が理解でき楽しむといった発達段階にあることが明らかになった。

おわりに

想像を誘発する造形活動「おはなしでてこい」で4歳児から導き出された創作話であった。結果として、4歳児の子ども自身にとっても自分の発想に驚き、喜びになった。自分で自分が好きになる教育として有効であったと考える。

擬人化でも考察したように、今日の子どもは乳幼児期から擬人化された架空のもろもろに囲まれながら成長していることが思われる。

そうした環境から、2、3世代昔の子どもとは比べ物ならないくらい、物の実態から解放され、本実践のように、イメージ豊かに話作りができるのでなかろうか。

註1 5歳児を対象とした総合的造形の教材研究—「おはなしふわふわ」の実践— 岐阜大学教育学部研究報告=実践研究=第12巻 59-70頁 2010.2

謝意

実践と研究報告にかかわり、本巣市立糸貫東幼稚園の服部あや子園長のご理解とご協力に対し、また、園児たちの熱心な取り組みに対し、心より感謝申し上げます。

本実践は長期に展開したために、4歳児の忍耐、興味関心の持続という点で難しさが考えられた。しかし、所期の目的以上の成果を得られたのは、常に積極的にかかわってこられた今西美枝子先生はじめとする年中クラスをご指導される先生方の熱意と不断の取り組みのお陰と考えます。お礼申し上げます。

